

『ターンテーブルの午後』
2026年1月18日(日) 12:00-14:30

In "Music JUNGLE" ジャズ入門講座：ハード・バップ 「黒いグルーヴと洗練の交差点」

予告広告

料金 ¥1,600./人 (現金のみ)
ワンドリンク+おまけドリンク
おつまみ、お食事持ち込み自由

予約制

QRコード=>HP=>メール

毎月開催予定

日曜日の午後は、コーヒーを片手にゆったりとジャズを楽しみませんか？
当店では月に一度、アナログレコードの豊かな響きを通して、ジャズの魅力をゆっくり味わう時間をお届けしています。

今回はジャズの中でも、とりわけ熱気と魂に満ちた“ハード・バップ”をテーマにしました。

1950年代半ば、ビバップの複雑さを土台にしながら、もう一度ジャズの原点であるブルースやゴスペルの温度を取り戻そうと生まれたスタイル。それがハード・バップです。

アート・レイキー率いるジャズ・メッセンジャーズをはじめ、ホレス・シルヴァー、リー・モーガン、ハンク・モブレー、マイルス・デイヴィスなど、多くの名手たちがこのスタイルの中で輝きを放ちました。

そのサウンドは、力強く、温かく、そしてどこか人間味にあふれています。

街の喧騒、黒人教会の高揚、人生の哀歓——

そうしたものが音の一つひとつに染み込んでおり、演奏者の息遣いまで感じられるのがハード・バップの醍醐味です。

本日は、スピーカーから放たれる太いホーンのアンサンブルや、胸の奥に響くドラムのビート、そして心をほどくようなブルースの香りを、ゆっくりと楽しんでいただければ幸いです。

ジャズの持つエネルギーと優しさが、皆さまのひとときを少しでも豊かにしてくれることを願っております。

ナビゲーター：ジャズ 一ノ月 (有吉 純)



ジャズを聴くときは、気分や体調に合わせて勝手にジャンル分けしています。「今日は癒されたいな…」なら安らぎ系、「元気出したい！」ならエネルギー系、「刺激がほしい…」ならテンション系。自分の気持ちにぴったり合った音楽に出会うと、もう感動でニヤニヤが止まりません。好きなミュージシャンは、ボーカルだとジュリー・ロンドンやダイアナ・クラール、インストゥルメンタルだとデクスター・ゴードンやアート・ベッパーなど。基本的に「安心して心地よく聴ける系」が大好きで、たまにジャズに説教されたり、心をわしづかみにされたりするのも楽しみのひとつです。

元ミュージック・バード (有料衛星デジタル放送) 「ターンテーブルの夜」ナビゲーター



<予約HP/メール>



<ご予約・地図HP>

<http://music-jungle.com/>

<e mail> musicjunglecafeandbar@gmail.com

<施工企業様>

ケンリックサウンド㈱、プレミアケーブル㈱、日本リンクス㈱、寄り処らん

■ ハード・バップってどんな音？

ハード・バップをひとことで言うと……

「ビバップのカッコよさに、ブルースのコクとゴスペルの温かみをぜんぶ乗せた、ジャズ界の“全部入りラーメン”」みたいな音です。

複雑なんだけど親しみやすい。熱くて、でも上品。まさに“旨みの層”が深い時代の音楽です。

■ どうして生まれたの？ — ハード・バップ誕生説

1950年代、ジャズはビバップで一気に難しく格好良くなったのですが、「うん、すごいけど……もっと体でノれるやつが聴きたい！」という声が演奏家たちからもお客さんからも出てきました。

そこで出てきたのがハード・バップ。

ブルースのしみる感じ、ゴスペルの高揚感、街角のざわめき。そんな“地に足のついたジャズ”が欲しくなったわけです。例えるなら、高級レストランから急に“うまい定食屋”に戻りたくなる、あの気持ちみたいなものです。

■ だれが盛り上げたの？ — 主役たち

まずはこの人、アート・ブレイキー（1919年 - 1990年）。ドラムで炎を上げるようにバンドを引っ張る、ジャズ界の“永久機関”。一度叩き始めたら止まりません。

そしてもう一人は、マイルス・デイヴィス（1926年 - 1991年）。クールなのに熱い。不機嫌そうに見えるのに音が優しい。“近寄りがたいのに惹かれる人”の代表です。

さらに、ホレス・シルバー（1928年 - 2014年）、ブラウニー（Clifford Brown、1930年 - 1956年）、モブレイ（Hank Mobley、1930年 - 1986年）、リー・モーガン（1938年 - 1972年）……

「このメンバーで不味くなるわけがない」という黄金時代の料理人たちが勢ぞろいでした。

■ 音の特徴 — ここを聴けばOK！

ハード・バップが楽しいのは、こんな理由です。

- **ブルースの香り**：ちょっと泣けて、すごく沁みる
- **ゴスペルの明るさ**：心がふっと軽くなる
- **ノリの良さ**：ビートが前へ前へ押してくる
- **テーマのキャッチーさ**：一回聴いたら覚えてしまうことも
- **アドリブの熱気**：聴いている全員の血圧が少し上がります

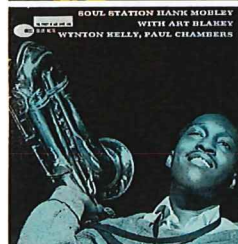
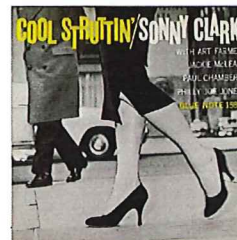
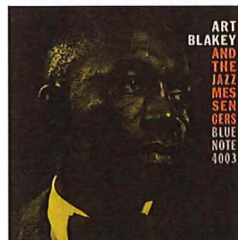
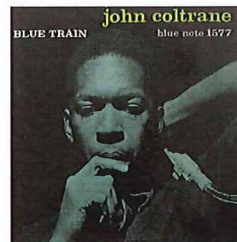
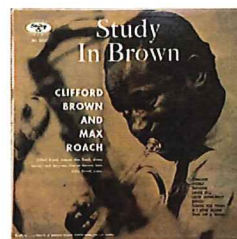
要するに、“難しそうに見えて、実はとっても気持ちいい”ジャズなんです。

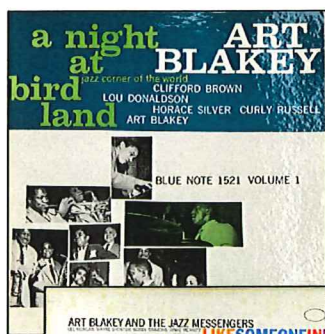
■ 名盤はこれだ！ — 間違いない7枚

- (1955) Clifford Brown & Max Roach / *Study in Brown*
- (1956) Miles Davis Quintet / *'Round About Midnight*
- (1957) John Coltrane – *Blue Train* (1957)
- (1958) Sonny Clark / *Cool Struttin'*
- (1958) Art Blakey & The Jazz Messengers / *Moanin'*
- (1960) Hank Mobley – *Soul Station*
- (1964) Horace Silver / *Song for My Father*

■ 今日の聴きどころ — 楽しむコツ

- ブレイキーのドラムの「まだいくの!?’という勢い
 - ホーン2管の“肩を組んだような”テーマの一体感
 - ワンホーンの自由でおおらかなソロ
 - リズム隊の止まらないエンジン
 - マイルスのミュートの切なさ
 - アナログ盤ならではの“音の空気感とヌクモリ”
- むずかしく考えず、音の“表情”を楽しんでください。





(1954) Art Blakey Quintet – A Night At Birdland, Vol 1 / Blue Note – BLP 1521
 Trumpet – Clifford Brown , Alto Saxophone – Lou Donaldson , Piano – Horace Silver , Bass – Curly Russell, Drums – Art Blakey
 Recorded live on February 21, 1954.

A1	Split Kick	8:26
A2	Once In A While	4:56
A3	Quicksilver	6:26



(1960) Art Blakey And The Jazz Messengers – Like Someone In Love / Blue Note – BST 84245

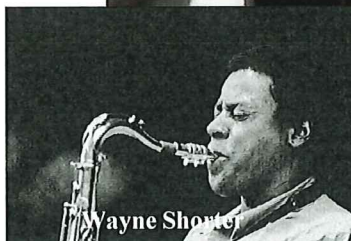
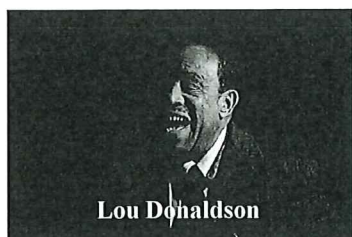
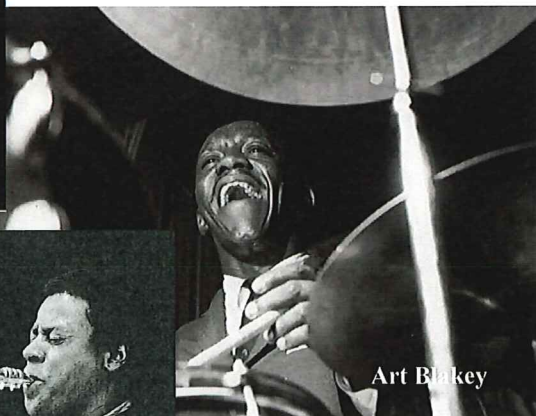
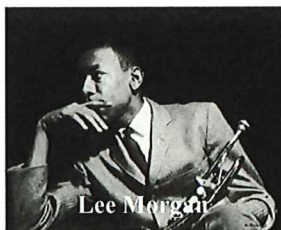
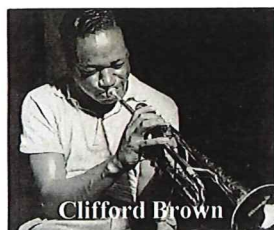
Trumpet – Lee Morgan , Tenor Saxophone – Wayne Shorter , Piano – Bobby Timmons , Bass – Jymie Merritt , Drums – Art Blakey
 Recorded on August 7 & 14, 1960.

A1	Like Someone In Love	8:00
A2	Johnny's Blue	9:10

1954年録音の『バードランドの夜 Vol.1』は、ハード・バップの誕生を象徴するライブアルバムとして、今も名高い名盤です。当時、ジャズはビバップの複雑な技術を土台にしつつ、ブルースやゴスペルの要素を前面に押し出す新しいスタイル—つまりハード・バップ—が芽生え始めていました。このアルバムでのアート・ブレイキー（1919年 - 1990年）のドラミングは、まさにその「ハード・バップの心臓」とも言える演奏です。力強く前に推進するビート、シンコペーションやハイハットのアクセント、ソロを引き立てる細やかな応答—ブレイキーのエネルギーが、演奏全体にライブならではの躍動感と熱気を生み出しています。

一方、1960年に録音された『ライク・サムワン・イン・ラヴ』は、実際にリリースされたのは1967年であり、録音時点ではハード・バップの成熟期を先取りしていたとも言えます。ブレイキーは依然としてドライビング・ビートを刻みますが、リズムのアクセントやポリリズムの多様化により、ソロやメロディの魅力をより洗練された形で引き出しています。曲全体のグルーヴを巧みにコントロールし、ライブ演奏の即興性と緊張感を保ちながらも、より構造的に成熟したハード・バップを展開しています。

この二枚を比較すると、『バードランドの夜 Vol.1』はハード・バップ誕生の象徴としての勢いと熱気を体現しており、1950年代半ばの新しいジャズの衝動がそのまま音になっています。『ライク・サムワン・イン・ラヴ』では、同じ推進力を維持しつつ、リズム表現とグルーヴの洗練が加わった成熟期のハード・バップが聴けると同時に、録音当時はまだ先進的なアプローチであったことがうかがえます。つまりアート・ブレイキーは、ハード・バップ誕生期から成熟期にかけて、その中心に立ち続け、演奏スタイルを時代に合わせて変化させながら、スタイルの進化を牽引した存在であることが、この二枚のアルバムから鮮やかにわかります。





(1956) Sonny Rollins – Saxophone Colossus / Prestige – PRLP 7079

Sonny Rollins (tenor saxophone), Tommy Flanagan (piano), Doug Watkins (bass), Max Roach (drums)

Recorded at Van Gelder Studio, Hackensack, NJ, June 22, 1956

A1	St. Thomas	6:45
A2	You Don't Know What Love Is	5:01
A3	Strode Rode	5:00



(1959) JR Monterose – The Message / Jaro – JAM-5004

Tenor Saxophone – J R Monterose, Piano – Tommy Flanagan, Bass – Jimmy Garrison, Drums – Pete La Roca

Recorded 24th November 1959, New York.

A1	Straight Ahead	5:23
A2	Violets For Your Furs	2:46
A3	Green Street Scene	6:15
A4	Chafic	5:10

ソニー・ロリンズ（1930年 - 元気です！）の『サキソフォン・コロッサス』と JR モントローズ（1927年 - 1993年）の『ザ・メッセージ』は、同時代に録音されたワンホーンのハード・バップ作品でありながら、音楽が描き出す風景は驚くほど異なる。ひとつは“巨匠の存在を示す堂々たる記念碑”、もうひとつは“職人的テナー奏者が静かに深みを提示した一枚”と言えるだろう。

ロリンズの『サキソフォン・コロッサス』では、まず彼自身の即興が圧倒的な存在感を放つ。太く揺るぎないトーン、モチーフを展開しながら物語を構築していく力強いアドリブ。その中心にあるのは、ロリンズ独自の“創造のドラマ”であり、一音ごとに彼の個性が鮮烈に刻まれている。

一方で、モントローズの『ザ・メッセージ』は、派手さではなく“語りの奥行き”で魅了する作品だ。モントローズのテナーは湿度を帯びたスモーキーな響きで、夜の静けさを湛えたような陰影がある。滑らかで優しいフレーズが静かに流れ、耳を傾けるほどに深みが増していく。華やかさとは対照的に、“内側へ沈み込む語り手”としての魅力が際立つ。

そして、両作に共通して参加しているピアノのトミー・フラナガンの存在が、このふたつの性格の違いをいっそう鮮明にしているのが興味深い。

『サキソフォン・コロッサス』でのフラナガンは、ロリンズの力強い即興を支えつつ、“空間のバランスを整える建築家”のように音の配置を決め、演奏に秩序と奥行きを与えている。控えめながら鋭いヴォイスिंगが、ロリンズの構築的な世界観を一段と引き立てている。

対して『ザ・メッセージ』では、フラナガンはより内省的で、モントローズの柔らかい語り口に寄り添いながら、繊細なタッチで音楽に淡い光と影を描き足す。必要以上に前へ出ず、バンドの呼吸に自然に溶け込んでいく“物語の伴走者”としての役割を果たしており、その柔らかなサポートが作品の叙情を一段と深めている。

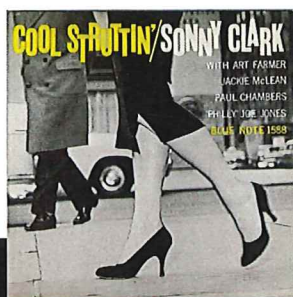


こうして聴き比べると、ロリンズの作品は“形を切り開く力”に満ちているのに対し、モントローズは“音楽の内側に静かに灯る熱”を描くタイプの奏者であることが見えてくる。ひとつはハード・バップの表舞台を照らす大きな光、もうひとつはその陰影を静かに彩る灯り。

フラナガンがその両者に異なる表情で関わったことこそ、この2枚を聴く面白さのひとつでもある。歴史的評価の面ではロリンズの名盤が語り継がれるが、『ザ・メッセージ』の慎ましく深い魅力は、ジャズをじっくり味わうリスナーにとって心に残る一枚となるだろう。

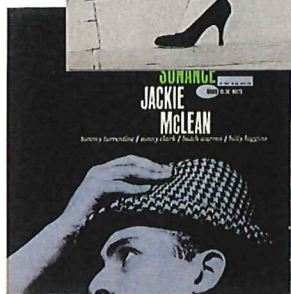
2枚を並べて聴くことで、ハード・バップという音楽の懐の深さ、多様な美学があらためて浮かび上がってくる。

以上で前半終了です。
 10分間の休憩にさせていただきます。



(1958) Sonny Clark – Cool Struttin' / Blue Note – BLP 1588
Trumpet – Art Farmer, Alto Saxophone – Jackie McLean, Piano – Sonny Clark, Bass – Paul Chambers, Drums – "Philly" Joe Jones
Recorded on January 5, 1958.

A1	Cool Struttin'	9:20
A2	Blue Minor	10:17



(1961) Jackie McLean – A Fickle Sonance / Blue Note – BLP 4089
Trumpet – Tommy Turrentine, Alto Saxophone – Jackie McLean, Piano – Sonny Clark, Bass – Butch Warren, Drums – Billy Higgins
Recorded on October 26, 1961.

B1	A Fickle Sonance	6:49
B2	Enitnerrut	5:47
B3	Lost	4:48

1958年録音のソニー・クラーク（1931年 - 1963年）の『クール・ストラティン』は、ハード・バップが最も美しく凝縮されたアルバムと言われる名盤です。ここで聴けるクラークのピアノは、ブルースの語法を軸にしながらも、リズムの間に軽やかな「跳ね」を作り、メロディがスッと立ち上がるようなエレガンスを持っています。

フィリー・ジョー・ジョーンズ、ポール・チェンバースという黄金リズム陣との呼吸も抜群で、ハード・バップの“歌心”“都会的ブルース感”“スウィングの粋”が理想的な形で表現されています。

一方、1961年録音のジャッキー・マクリーン（1931年 - 2006年）の『ア・フィッフル・ソーナンス』になると、ハード・バップはすでに次の時代へ踏み出し始めていました。マクリーンのアルトは、端正なハード・バップのフォームを基盤にしながらも、音にわずかに“きしみ”を混ぜ、緊張と不安を帯びた独自のエッジを持っています。

フレージングはより鋭く、音程をあえて揺らし、構造をゆがませることで、ハード・バップからモーダル、さらにはニュー・ジャズへの移行を示唆するようなアプローチが見られます。

■ソニー・クラークの演奏：ハード・バップの「黄金律」

クラークのピアノは、あくまでブルースの流れを上品に洗練させるという方向性を貫いています。バップ語法を土台にした歯切れのよいアドリブ、左手のシンプルだが絶妙なコンピング、フィリー・ジョーの推進力と一体化した“前へ進むスウィング”、メロディを「歌わせる」ことを最重視したアプローチなどが特徴です。クラークの場合、ハード・バップとは“黒いブルースと都会的センスの融合”であり、そこには強い破壊衝動よりも、クラシックなフォームの中での美しさの追求がありました。



■ジャッキー・マクリーンの演奏：フォームの内部から更新を仕掛ける

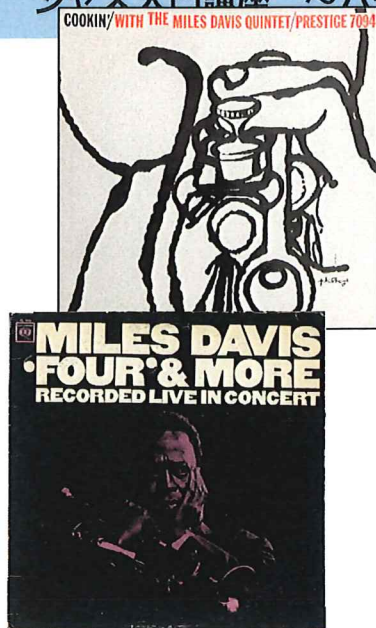
『ア・フィッフル・ソーナンス』のマクリーンはすでに、ハード・バップのルールを守りながら、その内部から形を崩し始めている点が最大の特徴です。音のエッジを強調し、感情の“ざらつき”をあえて残す、ブルージーというより、心理的緊張を生む音選び、フレーズの終わりに不安定さを残し、次の展開へ揺さぶりをかける、ハーモニー上の冒険を恐れない、初期モーダルの姿勢などが特徴です。マクリーンは、ハード・バップを単なるジャンルではなく、“新しい表現に向かう踏切台”として使っており、その姿勢がアルバム全体の緊張感を形成しています。



■両者を並べたときに見える「時代の変化」

- ソニー・クラーク - 『クール・ストラティン』 (1958)
 - ハード・バップを最も洗練された形で結晶化させた
 - フォームの美とスウィングの快楽を徹底的に追求
- ジャッキー・マクリーン - 『ア・フィッフル・ソーナンス』 (1961)
 - ハード・バップを起点に、より鋭い表現・新しい語法を提示
 - 次世代ジャズへの“入口”としてのハード・バップを提示

この約4年間の差が、50年代の「成熟」から60年代の「刷新」へ向かう空気を、見事に象徴しています。



(1956) The Miles Davis Quintet – Cookin' / Prestige – PRLP 7094

Trumpet – Miles Davis , Tenor Saxophone – John Coltrane , Piano – Red Garland , Bass – Paul Chambers , Drums – Philly Joe Jones
 Recorded on October 26, 1956.

A1 My Funny Valentine 6:00
 A2 Blues By Five 9:57

(1964) Miles Davis – ‘Four’ & More / Columbia – CL 2453

Trumpet – Miles Davis , Tenor Saxophone – George Coleman , Piano – Herbie Hancock , Bass – Ron Carter , Drums – Tony Williams
 Recorded on February 12, 1964.

A1 So What 9:10
 A2 Walkin’ 8:06
 A3 Joshua / Go-Go (Theme And Announcement) 11:14

『クッキング』が録音された1956年、ジャズはハード・バップ全盛期を迎えていました。ビバップから発展したスタイルで、ブルースやゴスペルの要素を取り入れつつ、リズムとハーモニーの洗練が進んでいた時代です。このアルバムでは、マイルス・デイヴィス（1926年 - 1991年）はコルトレーンやレッド・ガーランド、ポール・チェンバース、フィリー・ジョー・ジョーンズらとともに、ハード・バップの黄金クインテットを形成し、形式美とスウィング感を重視した演奏を展開しています。マイルスのトランペットは柔らかく丸みを帯び、余白を活かしたフレーズが特徴で、聴く者に安心感とスウィングの快楽を与えます。まさにハード・バップの美学を「完成形」として表現した一枚です。一方、1964年のライブ録音『フォア&モア』は、ハード・バップが成熟期を迎えつつ、モード・ジャズや自由度の高い即興演奏への移行期にあったことを示しています。若い演奏者たちを迎えたマイルスの演奏は、音色やフレージングの鋭さが増し、ライブならではの即興的緊張感が前面に出ています。形式を守りつつもテンションを高め、自由度のある表現に挑戦する姿勢が感じられます。ハード・バップの枠を出発点として、新しい時代のジャズへ橋をかける演奏になっています。この二枚を並べて聴くと、マイルスの変化とともに、ハード・バップそのものが「完成された美学」から「自由で個性の強い即興表現」へと進化していった過程が見えてきます。『クッキング』では形式美とブルース感を極めた演奏、そして『フォア&モア』ではライブの即興性と緊張感を前面に押し出す演奏。この差こそが、ジャズの進化を象徴しているのです。

Album	Cookin' (October 26, 1956.)	'Four' & More (February 12, 1964.)
Trumpet	29才 Miles Davis 1926年5月26日 - 1991年9月28日	38才 Miles Davis 1926年5月26日 - 1991年9月28日
Tenor Saxophone	29才 John Coltrane 1926年9月23日 - 1967年7月17日	28才 George Coleman 1935年3月8日 -
Piano	33才 Red Garland 1923年5月13日 - 1984年4月23日	24才 Herbie Hancock 1940年4月12日 -
Bass	21才 Paul Chambers 1935年4月22日 - 1969年1月4日	27才 Ron Carter 1937年5月4日 -
Drums	33才 Philly Joe Jones 1923年7月15日 - 1985年8月30日	19才 Tony Williams 1945年12月12日 - 1997年2月23日

“When music is over, it's gone in the air. You can never capture it again.”

（音楽は、奏で終えた瞬間、指先から離れ、空気の中に散っていく。

あの息づかいも、あの震えも、もう二度とは戻らない。）

ジャズ一ノ月（有吉 純）